

## ○ 目次

1. 品詞とは
2. 名詞
3. 形容詞
4. 副詞
5. 五文型との関係

### 1. 品詞とは

文法を扱う参考書や、それ以外でも言語を扱うようなコンテンツには必ず登場するこの「品詞」という言葉。皆さんは意味を理解しているでしょうか。

『デジタル大辞泉』で「品詞」と調べると、次のような簡潔な定義が示されます。

文法上の機能によって類別した単語の分け。(以下略)

まあその通りなのですが、少々簡潔すぎてよくわからないので、もう少し補足して説明します。

単語は、ある文や節や句（このあたりの説明は今後します）のなかで、文法的にどのような役割を担っているかによって分類することができます。その分類のことを品詞というのです。

まあこれがちゃんと理解できるようになるためには、まず一回文法をしっかりと理解しないとうまくいきません。とはいえこのことを頭の片隅に入れておかないと今度は文法が理解できません。これはなんというか循環なのですが、品詞を理解するためには文法の理解が必要で、文法の理解のためには品詞の理解が必要なのです。

ですから、これから学ぶことは、折に触れて振り返りつつ、少しずつ理解を深めていってもらえばいいかなと思います。イメージとしては接点を共有する円です。品詞と文法を相互に理解することによって円ができるのであれば、最初は小さな円でも、少しずつそれを繰り返すことによって、最初の理解という接点を共有しながら、新たな品詞の理解、新たな文法の理解を取り込んでいくことで、だんだんと大きな円にしていく、そういう感覚で学習してってください。

さて、『ロイヤル英文法』を紐解くと、大きく分けて14の品詞が紹介されています。それらのすべてを今回扱うことはできないし、その意味もありません。なぜなら、多くの品詞は、今回扱う3つの品詞の理解を前提とした品詞であり、逆に言えば、その3つの品詞を学ぶことなくしては、まったくもって理解できないものだからです。ですから今回は、その3つの品詞、すなわち名詞・形容詞・副詞について学んでいきましょう。

## 2. 名詞 (『リード』 pp. 136~143、『ロイヤル英文法』 pp. 81~141)

名詞 (英語では nouns、ゆえに辞書などでは n と表記される) とは、『ロイヤル英文法』によると「人や事物を表す語」と説明されています。この定義はもうそのまま覚えましょう。

さて、名詞について覚えるべきことは何かというと、大きく分けて2点あります。

1つ目は、名詞には**可算名詞 (countable→C)**と**不可算名詞 (uncountable→U)**の2種類ある、ということです (『リード』 p. 136、『ロイヤル英文法』 pp. 81~83)。詳しくはテキストに任せますが、たとえば apple 「リンゴ」や desk 「机」といった一つの形がはっきりしているものが可算名詞、water 「水」や snow 「雪」などどこまでを一つと数えてよいかわからないものや、peace 「平和」や difficulty 「難しさ」などの数えようのないものを不可算名詞といいます。

2つ目は、名詞には**冠詞**という別の品詞がつくことがある、ということです。これについても詳細はテキスト (『リード』 pp. 137~138、『ロイヤル英文法』 pp. 142~170) に譲りますが、ようは中学校でも習った a とか the とかです。こいつらは名詞にしか付きません。つまり、a とか the とかがついていたらそれは名詞のサインです。

ここで、冠詞について『リード』に無いこととして教えておきたいことがあります。それは、ネイティブはまず冠詞について考えてからそのあとにくる名詞を思い出す、という思考プロセスについてです。これについては『ロイヤル英文法』にもかかわっていらっしゃるマーク・ピーターセン氏の著作『日本人の英語』<sup>1)</sup>に詳しいです。興味のある人はぜひ読んでほしいのですが、この話を私なりにざっくりまとめれば、ネイティブはこれから言わんとするものについて考えるとき、それが

- ① 「たくさんあるもののうちの一つ」であるか、
- ② 「それしかない唯一のもの」であるか、
- ③ 「たくさんあるもの」であるか

をまず考えるそうです。そのうえで、①の場合不定冠詞 "a~" と考え始め、②の場合定冠詞 "the~" と考え始め、③の場合無冠詞で "s" と複数形を考え始めるそうです。このプロセスを知っておくと、いろいろ考えやすくなると思います。何せ日本語には冠詞なんてないので、先に名詞を考えて、それから冠詞をくっつけるという順番にしがちなのです。言語を学ぶときは、その言語でどのように思考されるのかをトレースすることも大事です。

---

<sup>1)</sup> マーク・ピーターセン『日本人の英語』岩波新書、1988。ちなみに同じレーベルで『続・日本人の英語』1990 も出ている。

### 3. 形容詞 (『リード』 pp. 152～157、『ロイヤル英文法』 pp. 254～310)

形容詞 (英語では adjectives、ゆえに辞書などでは **adj** と表記される) とは、『ロイヤル英文法』によれば、「直接名詞の前についたり、補語の位置に置かれて名詞や代名詞を修飾する語」と説明されています。皆さんは形容詞のことをよく「修飾語」の一つであると習ったと思いますが、これは英語では明確です。なぜなら英語 adjectives とは、ad「加えて」 jective「投げられたもの」という意味だからです。言葉の意味の時点ですでに半端ものなんですね。

さて、では形容詞が修飾語としてどんな働きをするかといえは、これはただ一つ、(名詞) を修飾します。これだけは覚えてください。形容詞はこれ以外修飾しません。つまり、形容詞が修飾していたらそいつは ( ) です。そして、基本的に (名詞) の [ 前 / 後 ] に置きます。こうならない例外は一つだけです。もう習っていると思うのですが、下を書いておきましょう。

日本語：私は何か温かいものが飲みたい。

英語： **I want something hot to drink.**

### 4. 副詞 (『リード』 pp. 152～157、『ロイヤル英文法』 pp. 311～346)

副詞 (英語では adverbs、ゆえに辞書などでは **adv** と表記される) とは、『ロイヤル英文法』によれば、「動詞を修飾するだけ [注：ad「加える」 verb「動詞」] でなく、形容詞やほかの副詞も修飾し、さらに名詞、代名詞、副詞句・節、そして文全体を修飾するなどの働きをする」語であるという説明がされます。まあざっくり言ってしまえば、「(名詞) 以外をすべて修飾する語」であるといえます (説明と矛盾しているように思えるかもしれませんが、その点に関しては後で説明します)。

端的に言えば、修飾語は形容詞でない限り基本的に副詞です。だから、出てくる単語が分からなかったらとりあえず副詞だと思っておくと心が軽くなりますし、大概それでうまくいきます。なぜ心が軽くなるのかはこのあと説明します。

## 5. 五文型との関係

ここまで3つ (+α 1つ) の品詞についてみてきました。ここからは品詞と五文型の関係について考えていきます。

端的に言ってしまえば、五文型に登場する四つの要素 (S・V・O・C) は、それぞれの要素になることができる品詞が最初から決まっています。

端から品詞名である V (動詞、verbs) を除いて、対応表は以下のようになります。

・ S および O → (名詞 ) のみ  
(主語 ) (目的語 )

・ C → (名詞 ) と (形容詞 )  
(補語 )

これを見て気づいた人もいるでしょう。(副詞 ) は、五文型の構成要素にはかかわらないのです。さきほど「心が軽くなる」と書いたのはこれゆえです。何せ、これがなくても文としては成り立つのですから。

さて、ここまでで文型の要素と品詞の結びつきについて説明しましたが、ここからが重要です。前回やった通り、五文型は英文を作るうえで必ず考えなければならない重要な要素です。そして、その要素ごとにならず対応する品詞がある、ということを確認しました。ですが、実はこれは逆なのです。五文型のある要素として考えられる位置にあるからこそ、その単語はその要素の規定に従ってある品詞として考えられるのです。そして、その要素にかかわる単語は、五文型によって規定される品詞に従って、品詞が決められるのです。

つまり、主語 S や目的語 O の位置に置かれていたらそれは (名詞 ) となるし、補語 C の位置に置かれていたらそれは (名詞 ) か (形容詞 ) となるのです。また、ある単語が主語や目的語を修飾していれば、それがたとえ辞書には名詞や副詞と書かれていても、働きとしては (形容詞 ) ですし、それが補語を修飾していれば (形容詞 ) か (副詞 ) となるのです。

今回は、この最後の一点だけでも覚えてほしい。究極的には、文に関するあらゆることを五文型というルールが決めるのです。